

「平和の俳句 18」

2016年06月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」5月分掲載の句から、十代の若者の句を紹介したい。

「戦争の生まるる星に巣箱吊(つ)る 藤本晴香(16歳)」<いとうせいこう そういう地球であっても、ひとつの巣箱に未来を託すのだ。明日を呼び込むのだ。手触りが大きく広がっていく句。> 残念ながら、地球という星では戦争のない時代はなかった。利益と領土を求め、また思想と宗教をめぐる、争い続けてきた。多くの痛ましい死者を出し、体と心に深い傷を負ってきたのが現実である。その中で、小鳥の命を愛おしみ、巣箱を吊るす優しい感性を嬉しく、大切にしたいと思う。聖書は、主イエスの示された福音は神に赦された者同士であるから「共に生きよ」、そこに、本当の喜びがあると告げている。

「毎日のいつもどおりがあたたかい 平石雪菜(14歳)」<金子兜太 おとなたちがよくいう言い草だが、中学二年生がいうのを聞くとほっとする。これが平和というものです。平和は温かいもの。> 14歳の平石さんはいつもどおりのあたたかい生活をしているのであろう。しかし、いつもどおりでない異常な生活の恐怖を知っているようだ。コヘレトの言葉は「神に与えられた短い人生の日々に、飲み食いし、太陽の下で苦労した結果のすべてに満足することこそ、幸福で良いことだ」と繰り返している。この平凡を生きられない人々がいる。まして、武器で殺し合う戦争なんて、まっぴらごめんである。平和を実現するためには、不断の努力が必要である。ペトロ書(一)3章11節に「平和を願って、これを追い求めよ」と書かれている。小さくとも声をあげ、行動をもって、平和を追い求める者でありたい。

「生きる意味押しつけるなよ俺探す 本多陽太(ひなた)(16歳)」<金子兜太 自分の考えで自由に生きたい。十六歳の高校生のこの自覚があつての平和。><いとうせいこう まさにそう。一億総なんとかと言われる筋合いはまるでないのだ。> 生きる意味を自分で探す主体性こそが若者の若者たるゆえんである。お前の人生は国のためにあるなどという、人権に逆行した自民党の憲法改正草案は受け入れられない。平和が私に私であることを保障する。

「人生を自由に選べる平和かな 磯貝(いそがい)友希(ともき)(15歳)」<金子兜太 やりたいと思うことがやれる自由、これが平和の第一条件なりと、この中学三年生は決めている。むろん戦争なぞ真ッ平。> 上記の本多君の句と重なる。自分の人生なのだから、自分自身で選び取っていく。米国の社会は、軍需産業と深く結び合った経済構造なので、戦争を実施し、継続することが避けられない。そこでは、軍隊に送り出すために、貧しい若者が必要となる。日本も、行き場のない若者が増えている。そんな若者を兵隊に駆り出すのではないかと、貧富の格差に危惧を感じている。

「平和はね今自分がいることだよ 具志堅ヤスリ(15歳)」<金子兜太 うろろししないで、われここにありと胸を張る。これが平和。><いとうせいこう 続く人の命を指すか、あるいはこの「今」を示すか、大きな一句だ。> 具志堅さんの句も、自分の居場所を確認している。居場所を持つことが最も幸福なことである。3人の若者は、自分は自分であるから、自分の人生を選び取り、居場所を確保していくと力強く詠んでいる。今度の参議院選挙から、18歳から選挙権を持つことになった。政治は生活に直結している。若い人々の積極的な政治参加を期待したい。

「風船は平和の形かも知れぬ 田中和貴(かずき)(16歳)」<いとうせいこう 十六歳が喝破した平和の形。中に空気だけが入っていて自らの力でふくらむ。そして風に浮く。かもしれない、ね。> 平和の形は風船のようだと言う。丸い「和」の形であろうか。和の中に入り、皆で力を合わせて膨らませ、平和を広げていきたいものである。